

十封謙全集

第五卷

㊦ 新潮社版

印刷／昭和五十年八月二十日
発行／昭和五十年八月二十五日

平野謙全集 第五卷

著者／平野謙

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社 郵便番号一六二 東京都新宿区

矢来町七一 電話東京二六六―五一―（業務）

二六六―五四―（編集） 振替東京四―八〇八

印刷所／塚田印刷株式会社

製本所／神田加藤製本株式会社

定価／三〇〇〇円



乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

平野謙全集／第五卷 ■ 目次

現代小説の問題点

昭和十年前後の文藝思潮……………12

転向と文学……………20

現代小説の問題点……………25

日本自然主義文学の位置づけ……………30

政治小説覚え書……………40

日本文学報国会の成立……………46

純文学論争以後

文藝雑誌の役割……………58

《群像》15年の足跡……………61

現代文学史の主軸……………64

新しい純文学概念の恢復……………70

再説・純文学変質……………73

純文学更生のために	85
わがアクチュアリティ説	88
認識者の文学	97
アクセントの打ちかた	109
小説の社会性	116
文藝時評というもの	128
文学者の声価	137
小説への不信をめぐる	145
政治と文学の関係	150
明治・大正の社会主義者たち	156
ふたつの潮流	166
自我絶対化の問題	169
ブライヴァシー判決に思う	172
昭和文学のこと	174

わが戦後史	178
衰えた文学運動	182
もうひとつの三派鼎立	185
『汚れた手』雑感	197
『蒼ざめたる馬』の自然描写	200
戦時下の雑誌のこと	204
純文学論争以後	209
中条百合子の作品	218
『詩人』『地霊』解説	221
門田実著『松川裁判の思い出』解説	236
純文学概念の意味	253
戦後の私小説	
アンチ「破滅型」ということ	264

「破滅型」からの発展	267
破滅せぬ作家のタイプ	272
潤一郎と秋江	277
正宗白鳥の意味するもの	284
私小説	291
批評の陥穽	298
年譜のおもしろさ	303
断念と未練の相剋	306
ふたつの日本的悟達の道	308
「政治の優位性」と「文学の自律性」	311
生江健次と木村良夫	325
川端康成の受賞	331
作品と作者の実生活	333
私小説の主人公と作者	335

必要な予備知識 341

机龍之助の魅力 344

戦後の私小説 351

『暗夜行路』後篇の逸文 362

机上の空論 367

宮原昭夫の芥川賞受賞作は果して借物小説か 373

題材と作品との関係 377

文学運動の流れのなかから

文学運動の流れのなかから 384

中野重治

中野重治序論 428

ロシア共産党の文藝政策と中野重治 448

福本イズムと中野重治	458
コップ結成と中野重治	469
転向文学と中野重治	479
片口安吉と中野重治	491
啄木・茂吉と中野重治	506
ナルプ解散と中野重治	517
社会主義リアリズムと中野重治	535

平野謙全集

第五卷

現代小説の問題点

昭和十年前後の文藝思潮

昭和九年二月二十二日づけで、日本プロレタリア作家同盟（略称・ナルプ）は、第三回拡大中央委員会の名において、「ナルプ」解体の声明書を発表した。この「ナルプ」解散を中心とする現代文学の危機的状況は、ほとんど歴史적으로よんでもいい教訓にみちたものだが、満洲事変以後衰頹の一路をたどっていた眇たる作家団体の解散など、齒するにたらぬというような意見は、当時もあったし、今日もあるだろう。というより、今日でも「ナルプ」解散という非文学的な（！）事件にひきつけて、歴史的な文学現象を説明しようとする私などの態度を、ひそかに嘲るような風潮が一般的なようだ（たとえば、『文学界』昭和三十二年九月号巻頭言など）。大体、今日ともなれば、「ナルプ」解散と

いうようなことをおぼえている人もほとんどいないし、知ろうとする人もすくないのが現状だろう。しかし、昭和八年の小林多喜二の虐殺から昭和九年の「ナルプ」解散にいたるほぼ一年間の歴史の動乱は、単にプロレタリア文学史上に銘記すべきエポックであるにとどまらず、ひろく現代日本文学史、現代日本思想史の運命に相渉る重大な時期といっている。「光輝ある歴史をもつ日本プロレタリア作家同盟の解散」をみずから宣言しなければならぬ地点にまで追いつめられた敗北の歴史は、昭和六年に勃発した満洲事変を出発の合図とする「戦争とファシズム」という国の情勢と精確に表裏するものであり、昭和十二年の日中戦争以後の荒涼たる現代文学の潮流を、いちはやく予兆するものとさえいえよう。「ナルプ」解散を中心とする前後数年間の歴史は、今日も新しく再検討するに値する教訓的（グランド・レクチャー）なエポックにはかならない。

昭和八年の末に『行動』『文学界』『文藝』など有力な文藝雑誌が相次いで創刊される前後から、「文藝復興」という合言葉がだれいうともなく唱えられはじめた。機をみるに敏なジャーナリズムは『文藝復興叢書』というシリーズを、いちはやく刊行しはじめた。注意すべきは、その叢書には谷川徹三や三木清のような哲学者も参加していたことである。文藝復興という漠然たる機運は、単に文壇の片隅

の声ではなく、文壇・論壇を通じた活気ある声と化そうとしたのである。こういう現象は、昭和四年に平林初之輔によって提唱された「政治的価値と藝術的価値」論争以来のことだった。インテリゲンツィアの積極的な能動精神が唱えられ、花やいだ浪漫主義再興が叫ばれたのも、この活気ある機運にうながされた一結果である。今日の日本文学は正宗白鳥の世代から石原慎太郎の世代にいたるまで、はばひろい文学世代の動員による空前の繁栄をきたしているが、その異常な繁栄ぶりの底には、断わるまでもなく空虚な淵が大きく口をあけている。文藝復興の合言葉のもとに、異様な活気を呈しはじめた昭和九年前後の日本文学も、もとよりその規模においては今日と比較にならぬが、不安な深淵の上に架橋した文学的殷賑にはかならなかった。インテリゲンツィアの能動精神とか知識人の復活などとよばれた当時の提言も、いわゆる不安の文学などとよばれた実存的な危機感と表裏一体をなすものだった。しかし、いま注意すべきは、その外見上の類似ではなくて、いわば実質上の相異の面だろう。

この時期の文学的実体については、佐々木基一に『文藝復興』期批評の問題」というオリジナナルな分析がある。そこでは私自身の現代文学史観なども手きびしく批判され、昭和九年から昭和十二年の日中戦争勃発にいたる表面上の

文学的繁栄が、結局「革命的インテリゲンチヤのイデオロギー的武装を解除することにおいて、大きな役割をはたした」というふうに、全く否定的に評価されている。しかし、その時期を文学の不毛期として否定しざること、そのために、その社会的背景を「戦争による、あるいは新植民地奪取による恐怖からの脱却の端緒がひらかれ、それが一時的に小市民の社会改革熱を鎮静させると共に、文学への熱情をかきたてる物質的基礎を提供した」というふうにみることに、やはり私は反対である。一口にいつて、今日の未曾有の文学的繁栄を相対的な社会的安定に根拠を求めるのとはほひとしく、当時の文藝復興熱を「安定と均衡」という地盤に求めることは、私には分明でない。当時の「小市民の社会改革熱」とは具体的に何をさすのか、当時の「安定と均衡」というような社会的条件がどこに存在したか、はもうすこし詳しい説明をきかぬとよくわからぬのである。当時、中野重治も「不安の文学」者をさして、彼らはヨダレをながした芥川龍之介ほどにはとても不安がっていない、ただ彼らは不安がること地利を得ようとしているだけだ、という意味の批評をしたことがあるが、こういう不毛性立証の論理は、一見いかにも鋭いが、やはり話を一方的にきめすぎる嫌いがあると思う。「文藝復興」などと大袈裟で空疎な言葉づかいで音頭をとられた当時の新機運が、

果して不毛であったか豊饒であったかを問うまえに、いくえにもおり重なった芽がそこにいり混っていたこと、つまり、おおよっぱにいて、そこには解放感と危機感とがつねに二重写しされていたこと、その二重性はほかならぬ「ナルプ」解散という非常事態と表裏していることなどの確認がまず必要だろうと思う。中野重治の言葉は鋭いが、「ナルプ」解散という大敗北が「不安の文学」なども産んだ直接の原因だという自己の責任感にはそこにはみいだしがたいのである。

いまここで私のいいたいことは、昭和九年以後、日中戦争勃発までの現代文学を、ひとつのエポックとしていかに評価するかについて、私どものあいだにもまだ一定した意見がない、ということにはかならない。このエポックはたしかに教訓的だ。しかし、そこから何を教訓としてつかみとるか、についてはまだ定説というほどのものがないのである。

いまふれたように、私はこの時期を解放感と危機感との二重写しにされた、一種緊張した時期とみたい。「ナルプ」解散によって、一種の解放感の生れたことも事実である。同時に、「ナルプ」解散によって危機感の切迫はいっそうかきたてられたことも否定できない。転向文学論争をはじめとして、社会主義リアリズム論争、行動主義文学論争、

日本浪漫派論争などを一種の解放感のもたらしたボレミークだった、といってよければ、それとオーヴァラップするシェストフ論争などは、やはり当時の危機感の産んだ文藝思潮にはかなるまい。

しかし、解放感と危機感の二重写しという性格は、やや一般的にすぎるかもしれない。もうすこし具体的にいえば、行動主義文学論争は「ナルプ」解散の直接的影響から、シェストフ論争はその間接的影響から生れた、といった方がいいかもしれない。無論、「ナルプ」解散と『悲劇の哲学』翻訳とのあいだに、どのような因果関係もあるうはずはない。昭和九年になって、一文学団体が自発的に解散したことで、十九世紀末のロシア人の虚無思想が移植されたこととは、ひとつの偶然事にすぎない。ただロシア人の手になる『有毒の書』がひとたび翻訳されるや、訳者たちもおどろくほどのさまざまな反響がひきおこされたにすぎない。当時『悲劇の哲学』を刊行した芝書店という発行所は、一流出版にも大出版にもかぞえられていなかった。しかし、正宗白鳥が新聞紙上にその感想を書き、つづいて小林秀雄が時評にとりあげると、『悲劇の哲学』は売れたのである。無論、それは正宗白鳥・小林秀雄だけのせいではない。三木清の『不安の思想とその超克』や藤原定の『主体的リアリズムの精神』などは、「ナルプ」解散以